

私が私でいるために

栃木県 栃木県立岡本特別支援学校 3年

菅野 莉子（すがの りこ）

みんなは、特別支援学校について、どんな風に考えているのだろう。

私は、病気をきっかけに、中学二年の一月に「自分の意志」で「岡本特別支援学校」に転校した。

今まで私は、病気を理由にできないことがたくさんあった。その一つが運動だ。小さい頃に体操を習っていた私は、体を動かすことが大好きだった。しかし小学五年の頃からずっと体育は見学。他にも、杖を使っているため、教室を移動しての授業も難しくなり、さらにアレルギーもたくさんあるので、調理実習や課外活動、給食さえもみんなと同じようにできなくなった。

小さい頃から病弱だったが、大きくなるにつれて悪化し、中学に入る頃には、学校さえ毎日行くことができない状態になった。そして、友達と自分との差にも悩み始め、学校生活もうまく送れず、焦りと不安が募っていった中学一年の夏。私は母にずっと抱えていた不安、焦り、生活の苦しさと共に「特別支援学校に行ってみよう。」と打ち明けた。たまたまテレビで流れていた特別支援学校のドキュメンタリーを見て、「こういう学校なら、私も輝けるかもしれない。自分の力を生かせるかもしれない。」と強く思ったからだ。

そんな私の思いに父と母も賛成してくれ、学校探しが始まったが、なかなか決まらず、中学二年に進級したときには、保健室登校になった。みんなと一緒に授業を受けられない毎日。しかし、負けず嫌いな私は必死で勉強した。けれど、正直もう無理だと思い始めていた中学二年の秋、ついに転校先が決まった。「これでやっと、きちんと学校に行ける。」と涙が出たのを覚えている。「行きたい。」と母に伝えてから一年が経っていた。

けれど、周りの人はあまり喜んではくれなかった。一人が涙を流し、三人がため息をついて反対した。「あなたの学力が下がってしまう。」「普通の学校じゃないなんて可哀想。」「そんなところ、学校じゃない。」…。次々に言われた。

特別支援学校は、そんなに悪いところなのだろうか。行かない方がよいところなのだろうか。

私は今車イスを使っているが、今まで周りの人たちは、視線を合わせて話したりはしてくれなかった。しかし、今の学校の先生は「当たり前のように」しゃがんで視線を合わせてくれる。今まで見下ろされて当たり前だった私には、こんな小さなことでも、一つ一つに優しさを感じるのだ。この学校は自然と「キラキラ

輝けるよう」，「心置きなく力を出せるよう」，先生方がサポートしてくれる，温かい環境を作ってくれるのだ。

「自分の力を生かせる」。これが，私が自ら行きたいと決めた理由だ。今までできずにいたことも，この岡本特別支援学校に来た今は全てできている。今は車イスでも体育の授業に参加している。先生が転倒防止ベルトを作ってくれ，それをして毎回思いっきり体を動かしている。アレルギーがたくさんあっても，「どうしたら実験や調理実習ができるのか。」と一緒に考え，工夫してくれている。私にとって，今の学校が大切な学びの場となっている。転校してもうすぐ半年が経つ。私はとても明るく「キラキラ」とした毎日を送っている。「転校を決めて良かった。」「ここに来られて良かった。」と心から思っている。

しかし，「どこの学校に行っているの。」と聞かれて，「特別支援学校です。」と答えると，「ごめんなさいね。」とか，「大変ね。」と言われる。どうして謝るのだろう。どうして大変なのだろう。いつも不思議に思う。確かに学校生活は大変だが，それはどこにいても同じこと。私はそのくらいに思っているのに…。誇らしくさえ思っているのに…。

私が転校してから感じた心のモヤモヤ。差別だと思えてならない言動。周りにはそういう人がたくさんいるのが現実だ。勝手に「可哀想だ。」とか「行かない方がいい。」とか決めつけないで欲しい。その場所で「自分の力をつけている子がいること」「楽しく学習している子がいること」を忘れないで欲しい。

私は，この学校に来てから夢が増えた。私ができることなんて，ちっぽけかもしれないけれど，病気を抱えながら地元の学校に行っている昔の私みたいに，モヤモヤしている子の背中を少しでも押せるように，まずは「特別支援学校の良さを伝えたい」。これも増えた夢の一つだ。

病棟の保育士さんにもなりたいし，看護師，助産師，理学療法士もいい。宇宙飛行士になって，宇宙にも行ってみたいし，車イスのモデルもかっこいい。

みんなは，特別支援学校について，どんな風に考えているのだろう。

私は今，特別支援学校で最高にキラキラしている。